特集2

『日新館天文台跡』について

～日本天文遺産に選ばれるまでの軌跡とその後～

薄　謙一（日新館天文台跡保護推進プロジェクト代表）

1. はじめに

本稿は、2020 年度天文教育普及研究会東北支部会（2021 年 3 月開催）において講演した“日本天文遺産登録第 1 号『日新館天文台跡』とは？”を基に執筆したものです。講演の内容をわかりやすくするため、より詳細に、かつ表題も変更しております。予めご了承ください。

2. 日新館天文台跡の価値と見合わない現状

2.1　日新館天文台跡の概要

日新館天文台跡は、戊辰戦争で焼失した會津藩校日新館の施設で、今に残る唯一の遺構です。天文台を所有する藩校は数が少なく、もともと極めて珍しい施設でした。加えて江戸時代に造られ、今も現存する天文台跡は、この日新館天文台跡しかないところから、2019 年 3 月に日本天文遺産に認定されました。

図 1　現在の日新館天文台跡

当時の天文台は観台(かんだい)とも呼ばれ、基底 22m余、台上方 10m、高さ 6.5mの大きな施設でした。しかし現在は、戊辰戦争後から明治 30 年頃にかけて南側約半分が風化により浸食されてしまい、当時と比較するとやや小ぶりの史跡となっています。周囲の石垣はその後の昭和にかけて、この地を購入した遠藤現夢（本名：十次郎）によって、浸食防止を目的に積まれました。昭和 10 年には、現夢の長男である遠藤義之助によって妙見祠が建立され、現在に至っています。

2.2　地域住民が名前も存在も知らない

（1）天文学者 渡部潤一氏の抱いた危機感

2016 年 7 月 2 日の花ホテル滝の湯（柳津町）で開催された渡部潤一氏の講演会は私にとってショッキングな内容でした。

渡部潤一氏は会津若松出身の天文学者で、日新館天文台跡の近くに住んでいたこともあって、日新館天文台跡はとても思い出深い場所だったそうです。まだ天文学者を目指す前の渡部潤一少年にとって、“天文台跡など日本全国あちこちにあるものだ”と思い込んでいたことも笑いながら語られました。しかし、自分が天文学者になり講演などで全国各地を訪問すると記録に残る天文台はことごとく壊され、形として残る天文台跡が日新館天文台跡のみであることに気づき、その重要性を認識したのだそうです。ところが、最近になって彼の友人から届いた「天文台跡周辺の乱開発」の話が、事態を一変させました。

日新館天文台跡が位置する場所は閑静な住宅街になっており土地の売買は自由です。天文台跡は会津若松市の史跡として市が所有していますが、周囲は誰もが売買できるため高さの制限はありますが、住宅にすることも駐車場にすることも可能な場所になっています。

講演会の翌日に現地に赴き調べてみると、それまで周囲に住んで居た方の転居が決まり、天文台跡北側の一部は売買に出され、北側の残りと西側は月極駐車場（整地中）になっていました。

図２　日新館天文台跡脇の宅地開発の様子

（2）厳しい現実

渡部潤一氏は日新館天文台跡を後世に残すために、史跡の希少性を武器に世界天文遺産登録に動いていたようです。

しかし、ロビー活動において関係者より突きつけられたのは、地元住民の理解や支援がどれほどあるかどうかでした。

天文愛好者を自称する私でも、日新館天文台跡の名前を聞いたことがある程度です。また、少年時代の渡部潤一氏と同じように日本各地には同じような天文台跡が残っているのだろうと勝手な思い込みもありました。おかげで、真剣に天文台跡について調査したことは一度もありません。私でもこの通りですから、一般の方々の認識は容易に予想できます。実際、後日行った初期の PR 活動での地域住民の反応は、その存在どころか名前も知らない方も多く白けたものでした。

3.　水練水馬池の悲劇

3.1　日本最古のプール

會津藩校日新館には、天文台の他に戊辰戦争後も残った遺構がありました。水練水場池と呼ばれた遺構は、天文台の東南方向 10～20m 程に位置し、甲冑を付けての水練と水馬が行われていました。日本最古のプールと言われ、海の無い会津藩の武士にとっては水泳の訓練を行うほかに、夏の暑さから逃げる格好の場所だったようです。

図 3　復元施設の會津藩校日新館に出来た水練水馬池

3.2　遠藤現夢が手放さなかった二つの遺構

水練水馬池は天文台を購入した遠藤現夢が同じく取得し、彼の死後に会津若松市に寄贈されました。遠藤現夢は明治の磐梯山噴火において裏磐梯の緑地化事業に成功した人間ですが、晩年に温泉開発事業に失敗し莫大な借金を背負う悲劇の人物です。その遠藤現夢が、天文台と水練水馬池を終生手放さなかったのは、ひとえに焼失した會津藩校日新館の存在を後世に伝えるためと考えられます。遠藤現夢のひ孫にあたる鈴木寧子さまへの聞き込み調査では、彼（遠藤現夢）が息子（遠藤義之介）に「日新館を忘れるな！」と指導していた事がわかりました。その後、遺族たちもこれらの遺構を残すためには会津若松市に譲渡することが遠藤現夢の遺志を継ぐ策として最も良い案として会津若松市への譲渡を決めたとも語っていました。

図 4　左：遠藤現夢、右：遠藤義之介

3.3　裏切られた整地

昭和 30 年頃の事、この池に大量のボウフラが発生しました。会津若松市には近隣の住民から多くのクレームが寄せられ、会津若松市では水練水馬池を埋め立てる事でボウフラの発生を抑えようと判断、日本最古のプールである水練水馬池は、こうしてその最後を迎えるところとなりました。この事件は、一つの教訓を私に教えてくれました。それは、いかに貴重なものであっても、その理解が近隣住民に及ばない場合はその価値は無いものと同じという事。悲しい教訓です。

4. 日新館天文台跡保護推進プロジェクト

4.1　会津そらの会と日新館天文台保護推進プロジェクト

福島県会津には、「会津そらの会」と言う名の民間団体が存在します。

「会津そらの会」は初代はやぶさの偉業を広く PR し、はやぶさ 2 計画を支援してきた団体です。私も在籍しているところから、会のメンバーに“組織のミッションとは異なるが日新館天文台跡を守るために支援を頂きたい”と申し出たところ快く引き受けていただきました。そこで、彼らが作る Facebook のグループに、私の知り合いの星仲間を加えた数十名でコミュニティグループを新しく作った次第です。これが「日新館天文台跡保護推進プロジェクト」の生まれた瞬間となりました。後日、資金調達のためにこのプロジェクトは「会津そらの会」とは別れ団体化しましたが、最初は情報交換のコミュニティ組織として出発しました。

4.2　ほぼ皆無の研究資料

情報交換とは別にプロジェクトが取り組まなければならないと、私の頭に浮かんだ事業は日新館天文台跡の PR 事業です。地域住民に詳しく日新館天文台跡を知っていただこうとこれまでの研究成果を調べ、パンフレットを製作し配布する事を手始めに行うことに決めました。幸いにして、渡部潤一講演会が行われた 3 か月後には、パンフレット作成のための原資となった「うつくしま基金」の紹介を受けていたので安心してパンフレットに掲載する記事の選定に取り組む事が出来ました。

パンフレット作成のために復元施設の會津藩校日新館、会津若松市教育委員会、福島県立博物館などに出向き調査協力を求め、最初は順調に進むと思っていました。ところが、調べれば調べるほど研究資料が無いことに気づかされたのです。

調べ見つけた資料の中で最も詳細に日新館天文台跡を記述していたのは「日新館志巻之二」で、頁 1 枚が図付きで解説しております（図 5；次頁参照）。

4.3　誤った内容のパンフレット

資料収集は不十分なものの、プロジェクトの活動原資を得るためにパンフレットを早急に完成させる必要がありました。

その為には、多少裏付けが取れなくても仕方がないなと敢えて加えた記事もあります。

その一つが、天文台の祠に納められた神様の正体です。それまでの調査で、祠の完成時期などは判明したものの納められていたはず

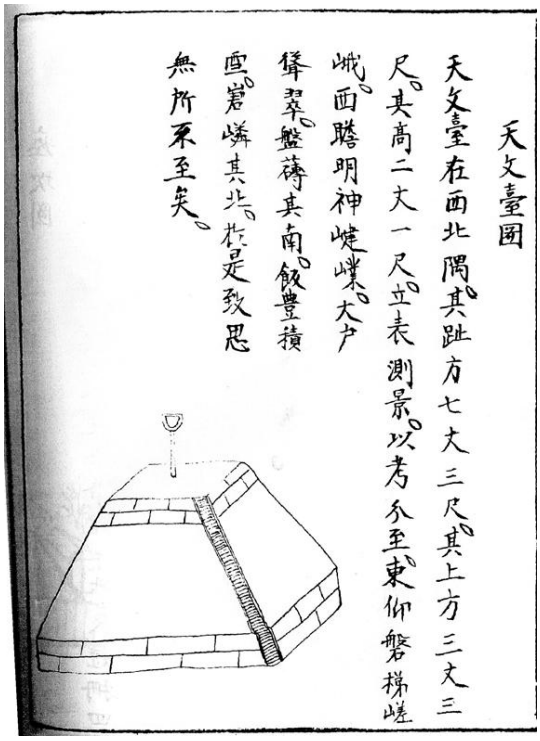

天文臺圖
天文臺在西北隅其趾方七丈三尺其上方三丈三尺其高二丈一尺立表測景以考分至東仰磐梯嵯峨西瞻明神嵯峨大户聳翠盤薄其南飯豊積雪嶙峋其北於是致思無所不至矣

図５　日新館志巻之二。天文台について記載されている。

のご神体は消失しており、祠を建てた遺族でもその正体は誰もわからないという事でした。

止む無く私は学問の神様だろうと仮説を立てパンフレットに紹介記事を書いた次第です。

4.4　日本天文遺産候補推薦状

日本天文遺産認定の選考書類には、基本的な事柄の他に会員の推薦状が必要です。日新館天文台跡の場合は、渡部潤一氏に書いていただくことになりました。この推薦状には私が作成したパンフレットが添付されています。そのため、会津若松市教育委員会では認定後にはなりますが、念入りに日新館天文台跡の研究資料を探してくれたようです。

おかげで、昭和 17 年発行の東亜天文学会会誌『天界 200 号』に日新館天文台跡に関する記事を見つける事が出来ました。そこには、前目で取り上げた祠が北斗七星の神格化である「妙見」の文字と一緒に記されています。これは初期のパンフレットに記載した内容の誤りの証明はもちろんですが、今後の日新館天文台跡の研究や PR に活かせる記事でもあったため、私は恥ずかしさよりもむしろ疑問が解決した喜びに浸った事を忘れる事が出来ません。また、それまでおざなりに扱われていた日新館天文台跡が会津若松市の宝物として扱われた事がうれしくてたまりませんでした。

4.5　日新館天文台跡保存会

平成 29 年 7 月 22･23 日に行ったイベント「ふくしま 星と宇宙の展覧会」は初めて天文台跡周辺の地域住民ファンを作ったイベントして忘れる事が出来ないイベントです。

講演会や研究発表、短編映画の上映、移動式プラネタリウムによる星空解説などのコンテンツで延べ 300 名の市民が集まりました。この 300 名の市民の中に、のちに日新館天文台跡保存会の立ち上げにあたって重要な方が入っていました。名を「桜木武彦」さん、見た目 70 歳後半のおじいさんです。各種のイベントの中でも日新館天文台跡の話に興味を持ち参加されました。

日新館天文台跡の PR 講演会は、渡部潤一氏に頼んでいたので内容は天文台跡の希少的価値に触れての講演です。その内容にえらく感銘を受けた桜木さんは後日私に一人の重要人物に会っていただきたいと場を設けてくれました。その重要人物とは、会津若松市の元教育委員会委員長で現在も市政に多大な影響を持つ「宗像精（むなかたただし）」さん、現在の復元施設會津藩校日新館にて館長を務めておられます。

同行した桜木武彦さんと一緒に宗像精さんの自宅にて宗像さんとお会いした私は、日本天文遺産・世界天文遺産認定の可能性を武器

に日新館天文台跡の希少性と、今後の維持にはどうしても隣地を会津若松市が管理する必要性を伝えました。しばらく私の話を聞き入ったのち、即座に市の担当者を呼び出した宗像さんは日新館天文台跡の現状と保護の方針を私らの前で問いただし、担当者に天文台跡隣地の取得を申し出るに至りました。ただし、このような要望は個人では受けつけられるわけもなく必然的に何らかの団体を設立する必要があります。この頃すでに地域区長に天文台跡の維持に尽力を申し出ていた私は、発起人を桜木武彦さん、会長を区長とした日新館天文台跡保存会の下絵が固まり、地域に住む議員を経由して会津若松市に隣地取得の要望を提出する流れが固まったのです。

2018年(平成30年)12月31日(月曜日)

日新館天文台跡 さらなる整備を

若松の町内会 市長に要望

会津若松市の讃教地区町内会連合会（大橋寛一会長）と米代一丁目町内会（佐藤武司会長）は28日、地域にある国内現存最古の天文台跡「日新館天文台跡」の整備推進を窪井照平市長に要望した。

天文台跡は日本天文学会が本年度創設した「日本天文遺産」の認定候補となっている。認定の成否は、来年月下旬に決定する見込み。地域では、年内3回草刈りなどの清掃活動を行い、町内会の宝とし維持管理を行っていく。認定候補の推薦をきっかけに、天文台への関心が地域でさらに高まっているという。

天文台跡を巡っては、国内第一号となるユネスコ世界天文遺産登録に向け動きもあり、大橋会長は「観光の目玉になる。地域誇りとして盛り上げていきたい」と話した。

市役所を訪れた大橋、佐藤両会長は同日、市役所を訪れ、窪井市長に要望書を手渡した。

図 6　町内会からの要望を伝える地元紙・福島民友の記事（2018 年 12 月 31 日）

日新館天文台跡保存会
地元町内会などが設立
若松

日本天文遺産に三月
新館天文台保護推進
に認定された会津若松
市米代一丁目の会津藩
校日新館天文台跡の保
存や観光誘客促進など
に向け、地元の町内会
などが「日新館天文台
跡保存会」を設立した。
十九日、市内の米代一
丁目児童館で設立総
会を開いた。
地元の米代一丁目、
山潟町の両町内会、天
文ファンらでつくる自
治会が組織した。
天文台跡は戊辰戦争
で焼失した日新館の中
で唯一残る遺構として
市史跡にもなっている。ただ、住宅街にあり場所が分かりにくく、安全性を踏まえて天文台跡と部への立ち入りが制限されているなどの課題がある。
総会には約二十人が出席し、会長に佐藤武司米代一丁目町内会長（68）を選んだ。任期は二年。講演会も開き、市教委文化課の佐藤真佐夫さんが天文台跡の歴史などを解説した。

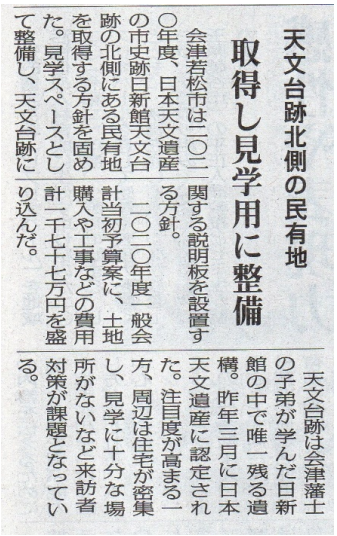
設立総会に臨む佐藤会長（中央）ら

図 7　天文台跡保存会設立を伝える福島民報の記事（2019 年 11 月 20 日）

4.6　会津若松市による隣地取得

日本天文遺産認定が正式に決定した事を受け日新館天文台跡保護の気運はあがり、隣地取得の可能性も同時に高まりました。しかし、保存会を設立するには規約等の問題もあり保存会として要望を行うことは不可能でした。早々に隣地取得を希望する私たちはやむを得ず保存会ではなく町内会として会津若松市長および議長宛に要望書を提出いたしました。

当初の保存会から要望する形での計画からは外れてしまいましたが、このようにして去る 2020 年に会津若松市による隣地取得がかなったのです。


天文台跡北側の民有地
取得し見学用に整備

会津若松市は二〇二一〇年度、日本天文遺産の市史跡日新館天文台跡の北側にある民有地を取得する方針を固めた。見学スペースとして整備し、天文台跡に関する説明板を設置する方針。

二〇二〇年度一般会計当初予算案に、土地購入や工事などの費用計一千七十七万円を盛り込んだ。

天文台跡は会津藩士の子弟が学んだ日新館の中で唯一残る遺構。昨年三月に日本天文遺産に認定された。注目度が高まる一方、周辺は住宅が密集し、見学に十分な場所がないなど来訪者対策が課題となっている。

図 8　天文台跡隣接地の取得を伝える福島民報の記事（2020 年 2 月 19 日）

5. 天文台跡のこれから（課題）

5.1　取得した土地の活用方法

取得した土地に関しては、未だ整地されずに雑草が生えるだけの土地になっています。この土地と天文台跡を使って、何が出来て市民に還元できるかが現在問われています。

現在検討している案は緑地公園として市民に開放する案が出ています。景観を破壊せぬよう今後の推移に注視しなければなりません。

5.2　未取得土地（駐車場）の早期取得

今回の取得は売買に出ていた土地であり、月極駐車場になってしまった土地は未だ個人所有のものになっています。所有者は他県在住の為に交渉も簡単に進みません。コロナ禍が落ち着いたら、交渉が再開せれる予定ですが、会津若松市のモチベーションを下げないようにこれからも市民に呼び掛ける必要があります。

図 9　日新館天文台跡に隣接する月極駐車場。

5.3　天文台跡の修復

天文台跡を維持してきた石垣は明治から昭和にかけて積まれたものです。その為、現在は風化がひどく落石などの危険性も指摘されています。日本天文遺産認定により観光客も訪れる事が見込まれますが、落石・落下の危険性が考えられます。

早急に天文台跡の石垣の整備を進める事が重要です。

6. 最後に

江戸時代に作られた現存する唯一の天文台跡。戊辰戦争後 150 年が過ぎた今も残ってきたのは、戊辰戦争で失った會津藩校日新館を次世代に語り継ぐために私財をなげうって守ってきた一人の男の存在でした。彼の遺志はその後も、偶然にも会津若松出身の天文学者に引き継がれ、単なる一史跡から日本の宝に変貌を遂げました。その天文学者の夢は日新館天文台跡をユネスコ世界天文遺産まで高める事。私たちは、その彼の夢をかなえるべく今後も引き続き活動していくつもりです。この講演に参加された皆さん、そしてこのレポートをお読みいただいた皆さんに更なる後押しをお願いし、一端筆をおきたいと思います。ありがとうございました。

薄　謙一